

水の魔法陣

上

斎藤 栄



藤
栄

の魔法陣
上



水の魔法陣 上

一九七八年五月一〇日 初版印刷
一九七八年五月二五日 初版発行

定価 九八〇円

著者 斎藤 栄

装丁者 沢田 弘

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 二三〇一六三六
販売部 二三〇一六一七一

印刷所 共同印刷株式会社
検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目次

第一章	受水槽の死	7
第二章	謎の投稿者	27
第三章	人工腎の娘	50
第四章	恐怖の誘拐	71
第五章	滅菌用塩素	99
第六章	容疑者たち	114
第七章	犯人の消失	144
第八章	ハイツの女	166
第九章	新幹線駅頭	178
第十章	真夏の追跡	191

第十一章	不幸な目撃……………	205
第十二章	銀行窃盗団……………	227
第十三章	印肉の指紋……………	235
第十四章	錯乱の万引……………	246
第十五章	大事故発生……………	258
第十六章	遺体の秘密……………	283
第十七章	荒廃した寺……………	300
第十八章	弁天の化身……………	317
第十九章	生と死の間……………	333
第二十章	古代の神話……………	355

水の魔法陣
上

第一章 受水槽の死

横浜市港南区にある野沢建設の分譲マンションへひばりガ丘ハイツは、緑に囲まれた小高い丘陵部にあって見晴らしがよかった。

五年前の分譲直後には、二階以上の窓からは、西方に富士山を望めたほどで、それがこのマンションのセールスポイントだったくらいなのだ。

今では、水谷章子の住む705号からは新興住宅の屋根が邪魔をして、富士山どころか、見えるのは物干場にひるがえるおむつという始末になり果てた。

それでも章子は、ダイニングキッチンの小窓の下方に、かなり大きな木斛の樹があつて、そこへ時折、目白やキジバトが飛んでくるのを見る楽しみを持っていた。

昨夜、夫は会社の慰安旅行で熱海へ出かけ、章子は一人で寝た。こんなときでないと、ゆっくりと朝寝坊もできないと思ひ、今朝は午前八時半まで床の中にいた。

起きて、まず顔を洗う。

水道の蛇口をひねり、コップ一杯の水を汲むと、それから自分の鼻先へ持ってくる。

プーンと嫌な匂いをする。今朝は特に強いようだ。このころ、こうした動作が章子の日課になってしまった。水道の水に臭気があるのだ。カルキと呼ばれる塩素のそれではない。

章子は、幼ない頃から、妙に嗅覚が鋭いところがあつた。母親が炊事中、風のために細く点けたガスの火が消えたのに気がつかなかったのに、章子は隣室にいてガス臭を感じた。お陰で、惨事にならずにすんだ。似たような話はいくらもあった。

章子は自分の鼻に自信を持つようになった。そのため、どんな料理を前にしても、必ず、まず匂いを嗅ぐ習慣ができてしまい、結婚直後は、よく夫に笑われたものである。

彼女が水道の水の異臭に気がついたのは、三日前からだった。煮沸すればそれほどではないが、生水を飲もうとすると、ツーンとした刺激臭があり、胸がムカツとする。

「あなた。この水、変じゃない?」

夫に訊いたが、鼻はあまりよくないらしく首を横に振るばかりだった。

「これは水道の水だぜ。水道局がちゃんと殺菌してくれているんだ。心配していたらキリがない。まして、横浜の水は、日本一うまいという評判なんだから……」

夫に言われてしまうと、へそかな〜と思ひ、強くは主

張できなかった。

しかし、今朝は格別にひどい気がした。

このマンションは八階建である。高級分譲マンションの触れ込みだったし、分譲価格も高かったので、一般のサラリーマンは少なく、大会社の部長や自由業の者が大半を占めていた。まれには年輩の看護婦や学生さえ、いることはいたがそれぞれ特殊の事情があるらしい。とにかく、こうした住人は、日曜日の午前は、ほとんどベッドにいますので、水の使用量は少ないのだ。

へ本当におかしいわ……

章子は蛇口をあげ放しにして、しばらく水を流れるままにしておいた。そして、時折、鼻を近づけて匂いを嗅いだ。普通、こうすると弱まるはずの嫌な匂いは相変わらずだった。

水道鉛管が腐蝕しているにしては、生々しい臭気である。上水道の中に異物が混入することがあるのだろうか。章子には、そうした配管機構などがよく分からなかった。しかし、このまま真夏に向かう時季に、臭気に悩まされつつけるのは、憂鬱だと思った。

へこんなときはどこへ相談したらいいのかしら？……やはり水道局に頼むのかしら……

考え込んだが、名案も浮かばず、仕方なしに蛇口を閉じようとしたとき、一瞬、水の出が自然に細くなった感じで

あった。

へあ

内心で呟いた。何か細くて黒いものが、水の流れに押し出されて、ながしの上に伸びた。

章子はビクツとした。

水道の中から、それがなんであれ、異物がとび出したのは、初めての経験だった。

章子は自分の瞳を疑った。

普通の家庭では、水道管の修理工事などがあると、必ず、しばらくは水道の水が濁る。しかし、高層マンションでは、受水槽の水がポンプで、高置水槽にあがり、そこから給水されるために、水の濁りはない。

つまり、汚泥などがはいっても、水槽の底に沈んでしまふからだ。

それなのに、今、章子の目の前に、ふた筋み筋、ハッキリと異物が現われている。

へこれは……髪の毛だわ……
理由もなく、章子はゾツとした。

これまで、こんな莫迦な話を聞いたことはなかった。生まれて初めての経験である。水道の蛇口から、髪の毛が流れ出るなんて……

章子は、念のために、ながしのステンレスにへばりついた一本の髪の毛を指先で、そっと拾いあげた。

「違うわ。やっぱり私のじゃない……」

一目で分かった。

章子の髪の毛は剛毛というのにふさわしい。

「こんなに硬いと、早くから白髪になるわよ」

高校時代、友人に揶揄からかわれたくらいのも硬さがある。それなのに、今、蛇口から出て来た数本の長い毛は、実に柔らかくて細い。そのまま、まるで生きているように彼女の指にからまりついた。

「薄気味悪い……」

章子は指先を震わせ、毛を落した。そして、いったん閉じたカランを再び開いてみた。

スーッと更に数本の毛が流れ出てくる。もう異状はハッキリした。

要するに、水道の中に、何かが混入しているのだ。どの場所かは分からない。しかし、髪の毛……それも人間のものだとすると、一体、どういうことになるのだろう。

「まさか……」

と、章子は自分の頭に閃ひらめいた、ある恐ろしい想像を、すぐに振り落した。

けれども、この異様な臭気はどうしたことだろう。

「お隣はどうなのかしら？……訊いてみましょう……」
長く住んでいても、マンション内の住人同士は、お互いにそれほど交際はない。隣の住人だけは、盆暮の贈り物な

どを受け取ってもらったり、こちらも預ったりで、自然に親しくなっている。

章子は簡単に化粧を直すと、廊下へ出た。

チャイムを鳴らすと、まだ眠そうな声が返ってきた。

佐原雄次という、この主人は大手商社の営業部長だというが、章子は滅多に顔を見た記憶がない。

「……奥さま……妙なことをお伺いいたしますけど、お宅、水道のお水、変な匂いがいたしません？」

章子は少し、上ずったような声で訊いた。

「……お水ですか？……さあ……どうでしょうか……」

気のない返事が戻ってきた。そして、ドアが開いた。

佐原夫人は、ネグリジェの上に、薄いピンクのガウンを羽織っていた。

「あら、お休みでしたの？　ごめんなさい」

章子は言った。

「いいえ、構いませんのよ、今日、宅は留守ですし……でも、一体、どうなさったの？」

「奥さま……変なんですのよ。水道の蛇口から……人の髪の毛が出てまいりましたの」

「え……」

「嘘じゃありませんわ。それにひどい匂いがするし……。ちよっとお宅のを拝見させていただきます？」

「どうぞどうぞ……」

佐原夫人に案内され、章子は自宅と同じようなつくりのキッチンのがしの前に立った。

蛇口をひねった。

カランから^{せし}迷り出た水に、章子は鼻を近づけた。

「匂いますわね」

「本当。」

佐原夫人がそばへ寄って来た瞬間、丁度、ソーメン流しのように黒い髪の毛が蛇口から吐き出された。

「……………」

章子が悲鳴をあげ、佐原夫人も呆然と立ち尽した。

もはや議論の余地はなかった。水道管の中に、思いもよらない変化が起きているのだ。

「武藤さんにお話してまいりますわ」

章子はそう言つて、佐原夫人と別れ、武藤孝の住む一階の101号室に、エレベーターでおいた。

へびが丘ハイツは、分譲マンションのために、建設業者による管理人はおかれていない。そのかわり、全四十世帯が選挙で選んだ自治会長が、建物の維持管理なども含めて運営しているのである。

武藤孝は、元興産銀行人事部長だった人物なので、入居者の信頼も高く、この種のポストには最適だと噂されていた。

章子の話を聞き終ると、武藤は白髪を左右に振るように

して、信じられない顔をした。

「……蛇口から髪の毛など……とんでもない。わたしのところの水道では、そんなことはありません。現に今朝も使いましたが……」

「このマンションの水は、一応、屋上へ汲みあげるんじゃないませんか？」

章子は訊いた。

「そうですよ」

「だったら、水質が汚れていた場合は、屋上に近い方から、異変が起きるのが普通ですわ」

「なるほど」

「このマンションでは、受水槽というのは、どこにあるんですか？」

中高層のビルでは、水圧が不足するために、高い階層の部屋に水を送るには、一度、水道局から来た水を、地下などにつくった受水槽のため、次にポンプアップする。これが日本での現在のやり方なのだ。

欧米では、この受水槽には問題があるとして、直接、本管から各家庭へ配管している。

受水槽は、したがって、水道局とは無関係のビルの施設なのである。そのために、水質基準でいわれる殺菌のための残留塩素のPPMなどは、受水槽にはいるまでが問題とされ、それ以降は、水についての素人であるビル管理者に

委せられているのが現状だった。

「ここは、地下の駐車場の下ですよ」

「行つて調べていただけませんか？」

「そうしますかな」

武藤は気乗りしない様子だったが、血相をかえた章子の勢いに、やつと重い腰をあげてくれた。

「ひばりが丘ハイツ」は、建物の周囲に約三十台分の駐車場を持つが、それでは全世帯に足りないもので、地下駐車場でも十台分相当のスペースを確保していた。

今日は日曜日なので、二、三の空きを除いて、車は割り当てられた位置に駐まっていた。

「あれが受水槽の掃除口ですよ」

武藤が教えてくれたのは、一隅に忘れられたような黒い姿を見せた一箇の鉄製マンホールである。

「これまで、掃除したことは？」

章子が訊いた。

「未だ、ないでしょう」

「車のそばじゃ、オイルが流れ込む心配がありませんの？」

「そう簡単にはいるわけはないでしょう」

しかし、武藤の証言にもかかわらず、章子の不安は広がっていった。というのは、一見、重そうなマンホールの蓋も、武藤が持ち出した鉄棒と、高さ十数センチの鉄の支点を使って、案外、やすやすとずらせることができたからである。

章子は、蓋が開いた途端、路面のガソリンを浮かせた水が、ポタポタと内部へ落ちるのを、驚いて見詰めた。

「私達の飲んでいる水は、こんな汚ないものだったんだわ……」

武藤は、夜間の非常用ライトを構え、丸く開いた暗い穴の中を照らした。章子も覗いた。

なんとという恐ろしい光景だろうか。足許に、こんな深い水のタンクがつくられていたのだ。

章子は生まれて初めて、受水槽というものを見た。それは暗く深い水であった。しかも、絶えず流れつづけている生きた水だった。

受水槽の受け口には、自動の水量調節器があつて、常に一定の水深を保てるようになっていた。

「あ、あれは……」

覗いていた章子は、その水面近くを半ば以上沈みながら浮遊している一箇の黒い物体を発見した。

「お……」

同時に武藤も呻いた。

彼は自分の瞳が信じられないように、反射的に右手で眼をこすつた。

受水槽の内部で、水面から突き出ているのは、明らかに人間の手であつた。しかも、それは死後なん日も経つたら

しく、ふやけ、肉がおちている腐乱死体なのだった。

「……………」

そのものの実体が分かると同時に、章子は、声にならぬ声をあげて顔をそむけ、その場に激しく嘔吐してしまつた。

なんとということか……。この高級マンションの住人は、長いこと死体の溶け込んでいた水を飲み続けていたのだ。

先刻、章子と佐原夫人が確認した髪の毛は、ポンプで吸いあげられ、屋上の高置水槽から配水されたこの死体の髪の毛だったに違いない。

「これは大変だ！」

武藤は跳ねあがつた。いかに慌てていたかは、無意識にマンホールの鉄蓋を閉めようとしたことでも分かった。それから嘔吐している章子を放り出したまま、一階の自分の部屋に駆けあがつた。

110番をかけに行ったのである。

そうした気配を、嘔吐しながら、章子はじつと聞いていた。このマンションの水道の配管が、こんな風になっているのを、今、初めて知つたのである。

蛇口から出る水は、「お役所」が配ってくれる清潔なものとはかり信じていた自分が、莫迦に思えた。

「こんな水を飲まされていたなんて……」

夢ならば醒めて欲しいとまで思った。

怖かった。

武藤はなかなか戻って来なかった。怖いもの見たさの心理で、章子は放り出されていたライトを、再び、水面へ投げかけてみた。

顔は水面下に沈み切っていた。人相は不明である。しかし、脱けた髪の毛が、水面に一面の縞模様をつくっている。腰の部分が上を向いて、少しずつ流れ動いていた。

〈女だわ〉

と章子は感じた。

男ならば、溺死者は俯せになるという風に聞いた記憶がある。それに第一、章子の視野にはいった限りでは、男性器らしいものが見えなかった。

死体は、ほとんど半裸体だった。初めからそうなのか、それとも内部で衣類が脱げてしまったのかは分からない。とにかく、こうして見ていると、カルキのような匂いにまざって、名状しがたい臭気が吹きあがつてくる。

「じきにパトカーが来るでしょう。奥さんもここにいて下さい」

電話から戻って来た武藤は、心細そうに章子に言った。

「……この女……どなたでしようか？」

「さあ……」と武藤は首をかしげた。

「とにかく、このハイツの住人じゃありませんよ。どなたも行方不明になっていませんから」

「こんな場所へ落ちるなんて……変な話だわ」

章子は、誰かが不幸に、足を踏みすべらせて墜落、溺死したものと考えていたのだ。

「落ちたんじゃありません」と武藤は恐怖を瞳にあらわして言った。

「殺人事件ですよ。さもなければ、蓋がピッタリ閉まっているわけがないんです」

武藤に指摘され、章子は「へあ」と思った。考えてみればその通りだ。過失で落ちたものなら、鉄の蓋を自分で閉めるわけではない。自殺だとしても同じことがいえる。第一、こんなマンションの地下の上水道の中へ投身するなどとは、常識外の話である。

その上、どうやら、死亡した女は、マンションの住人ではないらしいのだ。

「なぜ……なぜ、こんなところで殺したんでしょうか？」

章子は、事件の背後に、何か底知れない不気味さを感じて問いかけた。

「まったく分からない事件ですよ。まいったなあ……」

武藤は溜息をついた。

やがて、パポー・パポーとパトカーがサイレンを鳴らしながら、マンションの前に続々と到着した。

「殺人」の可能性大というので、たちまち、現場付近は制私服の警官で固められた。

武藤や章子は、こうなると小さくなって、発見当時の状態と経緯を、説明するばかりだった。

初動捜査班のチーフは、森山清という警部で、頬に大きな切り創のある鋭い顔付の人物である。

現場で、武藤と章子が喋っている間に、駐車場は地上からくだつてくるスロープの部分にロープが張られ、へ立入禁止の札がさげられた。

章子には、臭気の点が、執拗に質問された。

「……おかしいと思ったのは、三日前からですか？……その前にも何か変な感じは？」

メモを片手に、森山は章子に食いさがる。

「そういえば、時折、いつもと違うなとは思いましたの。

けれども、近頃、水道の水が随分、カルキ臭くなってまいりましたものですから、まさかこんなことは存じませんで……」

「髪の毛は、今日、初めて気がついたわけですか？」

「はい、そうです」

「このマンションでは、あなたのほかに、誰か騒いでいなかったのですか？」

「ええ。みなさん、呑気なのか分かりませんが、私、ちょっと匂いに敏感な方です……でも、こんな風になっているのだったら、もっと早く気がついてよかったと思いますわ」

「きつと、新しい水が注入してくるので、死体のあった部分の水は案外、動かなかったかもしれない」

森山警部にも、未だ、そうした臭気発生のおそれなど、細かいことは分からないのである。

実は、受水槽内の死体そのものが、まったく前代未聞の、突飛な事件なのだった。

当然、武藤には管理上の質問が浴びせられた。

「……この受水槽の清掃はどうなっていましたか？」

警部は厳しい表情で訊いた。

「私がこの自治会長を引き受けてから、全然、やっておりませんね。ですから、結局、ビルが建設されてから、このマンホールは開けたことがないと思います。といいますのは、ここを建てた野沢建設が引継ぐとき、『受水槽はやたらに触れない方がいい』といっておったのです……」

武藤はこう応えた。実は必ずしも、自信のある返事ではなかったけれども、こんな事件の責任を押しつけられてはかなわない、というニュアンスだった。

「あの蓋をあけるのに使う、鉄の棒と支点になる道具……あれはいつも、どこにありましたか？」

「わたしが出したように、マンホールの脇に、ずっと置いてありました」

「受水槽の蓋というのは、こんなに簡単にあけられるものですか？」

「ほかの例はよく知りませんがね。前にわたしが勤めていた興産銀行の横浜支店のものは、ボルトで締めてありましたね。まあ、いろいろなんでしょう」

武藤に、そうした建築上の専門知識を求めることは無理であった。しかし、森山警部は、事件が殺人であるにせよ、ないにせよ、大きな社会問題に発展しそうな感じがして、神経が苛立った。

次に、捜査陣のなすべきことは、死体を受水槽から引き揚げ、死因を含めた検死の実施と、現場周辺の捜査であった。

受水槽というのは、「水圧が不十分で、目的の高さに達しないとき」などに、建物の地下等に設けられた給水装置のことである。

建築基準法施行令の規定に基づく基準では、その構造をおよそ次のように規定している。

マンホール（直径四十五センチメートル以上の円が内接することができ、ものに限る）を設けること。水抜管を設ける等内部の保守点検を容易に行うことができる構造とすること……。

したがって、死体を引き揚げる作業を容易にするためには、受水槽内部の水面を下げる必要がある。槽内の水抜管から、水を排出しなくてはならない。

まず、受水槽の外についているバルブをとめ、上水の流